

入試方法改善のための検討と体制整備を

高大接続と学生の学力問題

高校と大学の接続をめぐる問題Ⅱ高大接続が、いま改めて注目されています。中教審では、高大間の接続と連携の強化方策が諮問事項となっており、高大接続特別部会を設置して審議を行っています。また、教育再生実行会議では「達成度テスト」なるものも提案され、その具体化に向けた審議が各方面で進められています。

ここで「改めて注目」と書いたのは、この問題をめぐる議論はいまに始まったものではなく、以前から引き続いて展開されているからです。それどころか、この問題は、大学にとっては創設期からつねに議論されてきた問題であり、大学教育のあり方にかかわる重要問題といえます。そのため、政府レベルの検討を待つまでもなく、大学関係者はこの問題を検討してきました。

高大接続については多くの問題がありますが、その根本は学生の学力問題です。近年、学力に問題のある学生が増えています。原因の一つは学習時間の短さにあります。各種調査が示すように、高校生・大学生の大

学・学校内外の学習時間は極端に短くなっており、読書量も少なくなっています。

高校生・大学生が全体に勉強しなくなっていることには、入試のあり方が関係しています。大学の定員と受験生数の関係で、事実上、大学全入かそれに近い状況の中で入試の多様化が進んでいます。入学者数に占める推薦・AO入試の割合は、2000年と2011年を比較すると推薦が31.7%から34.8%、AO入試が1.4%から8.5%へと増加しています。逆に一般選抜で入学した学生の比率は、65.8%から56.2%へと約10ポイント減少しています。推薦・AO入試の割合は私立が40.3%と10.2%と多くなっています。全体で見ると、定員割れしている大学ほど推薦・AO入試の実施率が高く、選抜方法が多様化しています。これらの大学では選抜機能はほぼ失われています。

推薦・AO入試をめぐる状況
推薦入試とAO入試は、大衆化した私立大学に固有の話とは言えません。公立でも24.0%と1.9%、国立でも12.4%と2.9

とすると、期待される能力や資質とはどのようなものなのか、対象学生のバックグラウンド（出身の地域や学校、学校内外での諸活動の状況等）はどうなのか問題になります。また、彼らが入学した後の教育や学習支援の方法についても同様です。入学時の能力や資質が異なり、入学後に多様な活躍を期待するのであれば、一般選抜経由の学生とまったく同一の教育・指導でよいのか。なんらかのケアは不要なのか等の問題もあります。

%という状況です。最近では、東大が2016年度入試から推薦入試を始めると発表して話題になっています。わが名古屋大学でもすでに以前から実施しており、募集定員に占める推薦入試定員の割合は18%に達しています。この割合は、旧七帝大では東北大学と並んで多いものです（東北大学は主にAO入試として実施）。

優秀な学生を一人でも多く確保することは、どの大学にとっても共通の願いであり課題です。現在のように、大学間の競争が激しくなっている状況では、学生の優秀さは長い目でみて決定的に重要です。どの大学にとっても、優秀な学生を確保するために組織的・系統的な努力は欠かせません。推薦入試には大学の期待が込められています。それが期待どおりに機能するためには検討すべき課題は多いのが実情です。

推薦入試で入学する学生は、学力等の能力や資質の面で一般選抜で入学する学生とは異なるものが期待されているはず。同じであるならば、わざわざ一般選抜と異なる試験を行う意味はないからです。

推薦入試の趣旨を活かすには
つねに入念なケアをしないと、推薦入試で入学してくる学生の能力等はすぐに期待はずれとなるのが一般的です。入学後の勉学に備えて高校時代から真剣に勉強する生徒はいまや少数であり、最小の努力で最大の成果（有名大の入試合格）を得たいという高校生が多数派だからです。名古屋大学推薦入試の受験者も例外ではないでしょう。彼らを指導する高校側にも、進学実績向上に向けた戦略や思惑があり、それに大きく左右されることも看過できません。

これらは推薦入試をめぐる諸問題のごく一部にすぎません。名古屋大学は旧七帝大の推薦入試トップランナーとして安閑としていただけません。今後も優秀な学生を求めて推薦入試を継続するとすれば、入試に関する諸問題を継続的に検討するための体制整備がまず必要ではないでしょうか。（夏目達也）

「大学教育改革フォーラム in 東海2014」を開催しました

2014年3月8日（土）、「大学教育改革フォーラム in 東海2014」が、名古屋大学東山キャンパスIB電子情報館・ES総合館にて開催されました。9回目の開催となる今回の参加者数は354名、昨年度に引き続き、東海地区のみならず全国各地から、多くの方々にご参集頂きました。

同フォーラムは、IB電子情報館で行われた基調講演「勉強ができる人間は立派か？—大学教育が目指すべき人間像」で幕を開けました。ES総合館に移動後、物理学講義実験研究会によるミニワークショップ「物理学の講義実験から体験学習への発展の可能性を探る」、ポスターセッションが同時開催されました。

ランチタイムを挟んで開かれた8つのオーラルセッションでは、A会場でFD（大学間連携、学生FD）、B会場でSD（職員育成と組織体制、教務知識）、C会場で学生支援（多様性の相互理解、学生生活の充実と学生支援）、D会場で自由発表（大学教育改革における職員の役割、学生の主体的な学び）というテーマが設定され、パネリストによる報告をもとに活発な議論が交わられました。プログラム終了後の情報交換会では、26件のポスター発表から参加者投票による優秀ポスター賞の選出が行われました。



2013年度名古屋大学学生論文コンテストの表彰式を開催

2013年度学生論文コンテストの表彰式が、高等教育研究センター会議室において、2月20日に開催されました。同コンテストは、「論理的な文章を書く」経験を奨励することを目的に毎年開催されています。今年度は、小野木克明教養教育院長、佐野充附属図書館長、戸田山和久教養教育院副院長、早川義一高等教育研究センター長による審査の結果、以下の4作品が受賞いたしました。表彰式では、表彰状と副賞の授与、記念撮影を行ったのち、審査員からの受賞論文に関する講評、受賞者からの受賞に関するコメントがそれぞれ述べられました。受賞した論文は、本学の学術成果として名古屋大学学術機関リポジトリに登録されます。



- 「大学生が考える女子力とは？—男女間の認識の相違—」
法学部1年 柘植結月さん
「教育の市場化は学びからの逃走を食い止めるか」
法学部2年 藤本広大さん
「なぜ若者は「ヒトカラ」に行くのか」
法学部1年 石川純さん
「島崎藤村「初恋」をめぐって—背景・表現・解釈—」
文学部1年 河合さやかさん

かわるばんへの皆さまのご意見・ご感想をお寄せください
Eメールアドレス info@cshe.nagoya-u.ac.jp

Higher Education Glossary

高等教育にまつわる用語集

発問 Questioning

『ハーバード白熱教室』として日本でも有名になったマイケル・サンデル教授は、発問の技法が優れています。1000人を超える学生が集まる大講堂の中で、「自分の兄弟が万引きしているのを見つけたら、あなたは警察に通報するだろうか?」「君は養子をもろうとき、その子に値段をつけられるかな?」などの発問をきっかけにして、主要な哲学者の思想と関連づけて議論を深めています。

教員が学生に対して教育的な意図を持って問う行為を、発問と言います。質問の一種と捉えることもできますが、発問と呼ばれるのには理由があります。たとえば、「星の重さはどのように測定することができるのでしょうか?」という問いかけについて考えてみましょう。この問いかけが学生から物理学の教員に対するものであれば、答えのわからない人がわかっている人に尋ねる質問です。一方、この問いかけが物理学の教員から学生に対するものであれば、答えのわかっている人が教育上の目的のために尋ねる発問になります。つまり、答えがわかっている学習を促進する上で尋ねるため、質問ではなく発問と呼ばれるのです。

教員が指導するときの言葉を、大きく説明、発問、指示の3種類に分類することがあります。説明、発問、指示の3つのバランスを変えるだけで、授業の印象は大きく変わります。これまで日本の大学の講義形式の授業においては、説明を中心とした授業が主に実施されてきました。しかし、学生の主体的な学習の重要性が叫ばれる現在では、授業において発問や指示を効果的に取り入れることが求められていると言えます。

発問は指示と組み合わせて使用することで学生はより主体的に考えるようになります。たとえば、「ある星と地球の間の距離はどのように測定することができるのでしょうか?」という発問に関連して、「あなたの考える方法をノートに書きましょう」や「考えられる方法を隣の学生と議論しましょう」などの指示を与えることができます。(中井俊樹)

研究大学の教育・学習センターが果たす役割

マシュー・オーレット(米国・ウェイン州立大学副学長補佐…前客員准教授)

今日、世界の多くの研究大学では、全学的組織として教育・学習センター(以下、CTL)を設置しています。CTLは大学教員のキャリアパスの各段階に応じたプログラムを提供しています。

博士課程院生の段階では、彼らを「未来の大学教員」として育てるために、授業設計、シラバス作成、学習者中心の教授方略、評価方法などの基本的な考え方を伝える必要があります。彼らはティーチング・アシスタントに求められるスキルや教員公募に向けてのティーチング・

ポートフォリオ作成能力などを身につけます。

新任・若手教員の段階では、赴任先の大学が置かれた状況や優先事項を理解すること、赴任先の学部生に共通する強みや弱点を把握すること、効果的かつ効率的に教える感覚を体得することが必要となります。具体的な対応策としては、新任教員研修、メンタープログラム、各専門分野のベストプラクティスなどが効果的です。

中堅教員になると、実験的な教授法や新しいテクノロジーを効果的に導入すること、昇進や

テニシア取得のための準備を行うことなどが求められます。同時にこの段階になると、若手教員のメンターを引き受けたり、自分の学科やカリキュラム改革の責任者として指導的な役割を果たすことになります。

ベテラン教員になると、学部生の教育・学習に対する関心や情熱をもう一度呼び覚ますことが大事です。若手教員のメンターを引き受けたり、全学的なカリキュラムや教授法の改革を主導する役割を期待されます。

CTLのスタッフは、教授法、授業設計、評価技法などにおけ

る最新の研究成果やベスト・プラクティスを取り入れたプログラムや研修を行うことによって、全学の教員集団をまとめる触媒としての役割を果たしています。具体的には、新しい教育テクノロジーの効果的活用、学生の学習動機とレディネスの多様性、各授業および学科単位での学習成果の測定、学科単位および全学規模でのカリキュラム設計と改革などが挙げられます。

CTLのような全学支援組織の貢献度を測定することは容易でなく、その効果を実感できるようにするには時間を要します。しかしながら、CTLには全学的な視点から教員集団を支援するという他には代えがたい役割があります。

(抄訳…近田政博)

読んでおきたい この1冊

Great Books on University

『わかりあえないことから ーコミュニケーション能力とは何か』

平田オリザ 著
講談社現代新書 2012年10月

およそ研究という人間の営みは、人文・社会学、生命科学、理学・工学を問わず、「自分探し」(人間とは何か)という根っこで繋がっているように思うことがある。本書を読み終えた後にもそう感じたが、もちろん本書の主題がそこにあるわけではない。

言語表現は人間が理解しあうための重要なツールの一つであり、とりわけ異なった価値観や文化を背景とした相互理解にはコミュニケーションの能力が重要な

役割を果たす。本書は、成熟型の社会、多文化共生の中でのコミュニケーション能力が如何にあるべきかを、著者のこれまでの実践に基づいて論じたものである。

若い部下のコミュニケーション能力を批判する上司への苦言、演劇創作を用いた体験型コミュニケーション教育の実践例、初対面の人との会話と国民性、女性上司から男性部下への指示言葉、「対話」と「会話」の違いや言葉の冗長率、医療・福祉介護での告知など、

平易な文章で述べられており、読みやすい。「わかりあえないことを前提に」や「コミュニケーション不全の原因は受け手側や環境空間に」など、研究室の学生さんたちや職場の教職員さんたちとのコミュニケーションをより充実したものにするヒントにできそうである。

著者は現代口語演劇の劇作家・演出家として知られ、ロボット工学研究者との協働で製作された「アンドロイド劇場」でも話題になった。著者が提唱する短い劇の創作や演技を用いた教育方法が小中学校の教科書に採用され、2005年からは大阪大学コミュニケーション・デザイン・センターの教授として、大学院生を対象に「コミュニケーションをデザインする」という新しいコミュニケーション教育に挑戦している。

(早川義一)

高等教育研究センタースタッフ(2014年4月現在)

センター長 水谷 法美 専門領域: 海岸・海洋工学

教授 夏目 達也 専門領域: 高等教育学、技術・職業教育論

准教授 中井 俊樹 専門領域: 大学教育論、高等教育マネジメント

助教 齋藤 芳子 専門領域: 科学技術社会論

研究員 小林 忠資 専門領域: 比較教育学・教育人類学・高等教育論

客員 マリア・テレシア・ネラッド (米国・ワシントン大学)

高 益民 (中国・北京師範大学)

野末 俊比古 (青山学院大学教育人間科学部)

中原 淳 (東京大学大学総合教育研究センター)

青野 透 (金沢大学大学教育開発・支援センター)

名古屋大学高等教育研究センター

〒464-8601 名古屋市中千種区不老町
Tel 052-789-5696
Fax 052-789-5695

E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp

URL http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/